

ボーイスカウト東京連盟
あすなろ地区 広報誌
第28号
2019年(令和元年)
9月20日
組織拡充委員会

第24回世界ジャンボリー感想文 特集

派遣団第9隊

中野8団 VS隊 北川 龍 軍鶏班

私は「国と国との文化の違いを理解し、自分の見識を広げる」という目標を立てて、今回のジャンボリーに参加した。その目標を達成するために、他国のサイトの訪問や、アリーナ周辺でのワッペン交換などの活動をした。またこれらの他にも、アクティビティや食事など、様々な経験を今回のジャンボリーで体験することができた。

それらの活動のなかでも、次の3つの経験が特に印象に残っている。

一つ目が日本と外国との価値観の違いだ。例えば日本人と比べて、外国人(特にアメリカ人)は自分の意見を貫くことが多く、日本人より個人を重視する国民性を持っていたことが大変印象的であった。

また、食事の面でもアメリカの食事は日本と比べて味付けが質素だったり、大雑把なものが多かったことが印象的だった。このことについて日本に帰国してから調べてみたのだが、アメリカは清教徒の移民が由来で、その清教徒達が質素な暮らしを重んじていたということが、現在のアメリカの食事に繋がっているのだと知ることができた。

他にも日本人と比べて服装が非常にカジュアルだったり、エスカレーターで片側に寄ったりすることがなかったりと、細かい部分で文化の違いを感じることもできた。

私はこれらのことから、ある国では常識であることも、別の国では常識でなくなったり、それがお互いの認識の行き違いを生むことがあるということ深く理解することができた。

二つ目に印象に残っていることが、他国のスカウトとのワッペン交換を通じた文化交流だ。

ボーイスカウトにおいて、ワッペンにはその国や地域の象徴的な風景や伝統的な模様が描かれていることが多く、その国のワッペンを知ることで、その国の文化を知ることができると言っても過言ではないほどである。

例えばオーストラリアのワッペンならば、アボリジニの伝統的な模様だったり、チリのワッペンならば、アンデス山脈とラマが描かれていたりする。

私は今回のジャンボリーを通して、約30ヶ国、145枚のワッペンを交換することができた。ワッペンの他にもTシャツや外国の制服、バックやネックチーフなど様々なものを交換して、文化交流をすることができた。

また、ワッペン交換を通じて、他にも自分の英語力を磨くなど、様々な経験を得ることができた。

ワッペン交換では、値引き交渉や自分の意思を伝えるときに英語が必要なことが多い。交換を始めて最初の頃は相手の英語を聞き取れなかったり、誤って聞き取り、トンチンカンな返事をしたりなど、うまくいかないことも多々あったが、交換を重ねるにつれて、自分の英語力を飛躍的に向上させることができ、簡単な世間話や、自国の文化紹介をできるようになった。

他にも日本の文化が海外において、想像以上に人気だということを発見できた。例えば日本の富士山の模様が描かれたワッペンは、一枚で数枚のワッペンと交換してもらったり、日本派遣団の法被は外国のスカウトに「Kimono」と呼ばれ、連日交換を持ちかけられたりなど、日本の文化が海外で浸透していることをよく理解できた。

三つ目に印象に残っていることが、大会のアクティビティだ。

私は大会期間中、文化交流に主軸を置いて活動をしていて、ジャンボリー中は2回しかアクティビティに参加しなかったが、どちらのアクティビティも、普段の生活では滅多に味わえないもので、深く思い出に残っている。

一つ目のアクティビティはラフティングだった。ラフティングと言っても、安全性の問題からか、そこまで激しいものではなく、ゴムボートを漕いで、たまに飛び降りて泳いだりする程度のものであった。それでも、水が渦巻



く急流を下ったりすることがあって、これまでにない爽快感を味わうことができた。

二つ目のアクティビティはキャノピーだった。キャノピーは、ツリーウォークのようなもので、森の中を飛びまわるような感覚は、非常に爽快であった。ただ、木の上での待ち時間が長く、飛んでいる時間よりも、待ち時間の方が長かったことが残念だった。

私は今回のジャンボリーで自分を大きく成長させることができたと感じている。外国のスカウトとの交流やアクティビティ、全てがかけがえのない思い出であり、今後の人生でも決して忘れることはないだろう。ジャンボリーに参加する前に立てた目標は、自分では十分達成することができたと考えている。今後は、海外の人間と交流する機会があったら積極的に参加し、今回得た経験を活かしていきたいと思う。

中野11団 VS隊 木村 恒陽 ハヤブサ班

(参加理由) 昨年の日本ジャンボリーでは、香港のスカウトと国際交流をしたので、もっと英語を使い、コミュニケーションを取りたいと思った。国際交流に興味を持ち、アメリカで行われる世界ジャンボリーに参加してみたいと思った。

(目的) ①日本と海外の文化の違いを知る。②日本では経験できないアクティビティを体験する。

(目標) ①日本文化紹介の水習字を成功させる。②外国の人と交流する。③外国の食文化を知る。
④毎日プログラムに行く。

(目標に関しての感想) ①水習字は評判がよく、皆とても楽しんでいて、こちらがゲストの名前を漢字で書き、それを手本として書いてもらった。日本文化に興味がある人が多く、同じ読み方なのに違う漢字なのかなど、たくさんの質問をされた。日本語でも、説明の仕方が分からなかった。

また、カタカナやひらがなに興味がある人がいて、カタカナ・ひらがな一覧表を書き、プレゼントした。すると、読み方を教えてほしいといわれ、僕の後に復唱してもらった。楽しそうな顔で、楽しそうな声で言ってくれて、僕もとても楽しかった。

②交流して気づいたことはたくさんあった。まず、会場を循環しているバスに乗った。少しでもスペースがあれば二人席でも関係なしに、グイグイ座ってくることに驚いた。

また、日本や東京の街、車、自転車などに興味がある人が多く、たくさん聞かれた。聞きたいことはとことん聞いてきた。お互いに質問を言い合う会話も面白かった。

大会中、アメリカのカブスカウトとアリーナ付近で、アイスを食べながら交流ができ、カブについて話しをして、カブの進級の動物が国によって違うことが分かった。

③ジャンボリー中、たくさんの国の料理を食べた。ペルーのカレー風煮詰め料理、イタリアの肉トマトパスタ、デンマーク交流夕食会でのタコス、アメリカのクラムチャウダー、エジプト・香港・カナダのお菓子などを食べた。

外国のお菓子は、すごく甘くて、砂糖の塊のようなお菓子があり驚いた。また、料理はたくさんのスパイス・香辛料が使われていた。タコスの肉は、キムチのような辛さだった。また、しょうゆをしょっぱいものだと思ってない人がいて、教えてあげるととても驚かれ、国によって味の感じ方が違うことが分かった。

④アクティビティをたくさん経験したいため、毎日プログラムに行こうと考えた。僕はバディと、今回のジャンボリーで7個のプログラムを経験した。

僕がやりたかったジップラインは、体重制限で挑戦できず残念だったが、迫力のあるラフティング、怖かったザ・ロープ、体が疲れたスパルタンレース、的に全然当たらなかったアーチェリー、2匹釣れたフィッシング、強い雨で避難して少ししかできなかったスキューバー、初めてで難しかったスケボー。すべて、とても印象に残っており、ジャンボリー中、プログラムを目一杯楽しんだ。

(目的・目標の反省)

今回たてた目的・目標は達成することができたと思う。ただ、プログラムを楽しみすぎて、みんなのように交換で良い収穫は出来なかったと思う。でもプログラムを楽しみたかったので、それは仕方のないことだと思う。12日間たくさんの文化の違いを発見することができた。

水習字については、リーダーとして計画→準備→実施まで行った。自分で全部計画するのは初めてだった。自分の計画したプロジェクトを楽しんでもらって、大成功して大きな達成感を感じ、本当に嬉しかった。



今現在、自分の得意といえるスカウト技能は思いつかないが、これから自分の自信が持てる技能を習得し、普段の活動で計画して実施してみようと思った。

(感想、今後について) ジャンボリーは、12日間と最初は長いと感じたが、慣れてきたころに終わってしまった。人生に一度の貴重な経験ができて良かった。

今後は、この経験を忘れず、この経験を後輩スカウトや指導者に伝えたいと思う。そして、ジャンボリーのことを知らないスカウトが多いので、ジャンボリーについて知ってもらいたい。

自分の体験を伝えて、「ジャンボリーに行ってみたい!」と思ってもらえるようにしたい。また、後輩スカウトの指導もしっかりできるようにしたい。

今後も、学校生活と両立しながら、ボーイスカウト活動を続けていきたい。

中野11団 VS隊 東條 英臣 カワセミ班

(参加理由)

- ・ボーイスカウトの日本代表として、世界ジャンボリーに参加したかった。
- ・普段あまり体験できないネイティブの英語に深く接してみたかった。

(目的)

- ・様々な国のスカウト達と積極的に交流する。
- ・日本と海外の食文化の違いを体感する。

(目標)

- ・Novusや日本のスカウトグッズを10人以上の海外スカウトと交換をする。
- ・自分が使える英語を駆使して、積極的に交渉をする。
- ・カルチャーデイを利用して、様々な国のキャンプサイトに行き、各国の食文化を味わう。
- ・日本では出来ないようなアクティビティに参加する。

(目標に対する感想)

- ・Novusは参加当初から既にすれ違ったスカウト同士がとても積極的に交換し合っていたので、簡単に10人以上のスカウトと交換することが出来た。
- ・交換品は個人的に用意していたものに、日本連盟とあすなろ地区からそれぞれ支給されたものが加わって膨大な量になっていたのも、開会式の翌日から気合を入れて交換をした。
- ・交換品を交換する際には、必ず英語で交渉するようにしていたので、一回一回の交換に時間がかかって大変だったが、自分の英語力でも思いが伝わったのでとても楽しかった。
- ・カルチャーデイは午前中がフリーだったので、その間に行ける範囲内でできるだけ多くの国を回るようにした。
- ・国によって全く違う食習慣や接客で、日本では味わえない特別な体験ができ、楽しく回ることが出来た。
- ・ビックジップのアクティビティは9時間待ちで乗ったが、山から一切止まることなく、長距離を滑り降りたのでとても爽快で、眺めも良かったため愉快的な体験となり、特に思い出深い。

ビックジップは体重制限がかかってほとんどの日本人は乗れなくなってしまったが、私は問題なく乗ることが出来た。

(目的に対する評価)

- ・様々な国のサイトを積極的に回って交換を求めたので、多くの海外スカウトと交流出来た。
- ・日本と海外とで、味付けや盛り付けなどに多くの違いがあることを、身をもって知ることができた。

(ジャンボリーを通しての感想)

・初の世界ジャンボリーで初の班長だったので、振るまい方の勝手が分からず、指導者や同じ隊の方々には迷惑をかけてしまう場面も多々あったが、今振り返ると、どれも貴重な経験になったように思われる。

また、日本ではできないようなアクティビティやイベントをたくさん体験することができたの



で、アメリカでキャンプができて幸せだった。

辛い事や苦しい事もあったが、それ以上にバディや班員、隊員達と協力し合うことが本当に楽しかった。

(今後について)

・今大会で培った技能や経験を後輩スカウトに伝え、今後のスカウト活動に少しでも役立てられるように、教え導いていきたい。

また、3年後の日本ジャンボリーや4年後の世界ジャンボリーで役立てるように、今後もスカウト活動や学校生活などを通して、技能と経験を深めていきたい。

派遣団第12隊

杉並3団 BS隊 柴田 門 烏班

今回作文を書くにあたり、最初に浮かんできた言葉が「楽しかった」です。たくさんうまくいなくて、困ることもあったけれど、やはり「楽しかった」という感情が一番大きいです。それは周りのみんなが支えてくれたからです。

いろいろと迷惑をかけた事もあると思います。それでも手伝ってもらったり、助けてもらったりしました。こうした先輩方のおかげで、思いっきりジャンボリーを満喫することができました。

24WSJは2週間の長期間キャンプでした。私はこのジャンボリーが2週間というところにも意味があるのかなと思いました。長期間でないと分からないこと、経験できないことをいくつかもしたからです。その経験をしたから持つことができた考えがあります。それは人の気持ちを考えてみることです。

日本人でも他の国の人も、一人ひとり思っていること、考えていることは違います。そのためみんなが自らの意志だけで行動していると、絶対に衝突が起きます。しかし少し人の気持ちを考えて行動するだけで、がらりと変わります。このことを世界中の人が実践したら、もっと平和でいい世界になると思います。

私が24WSJでうれしかったことは、大自然が広がる中でキャンプ、アクティビティができたことです。元々、木や水などの自然が大好きで、会場についた時には感動しました。今回、大自然の中でキャンプをして、自然のありがたみを深く実感しました。大きな雷が落ちてきたり、雨が降ってきたりした時には偉大だなと思いました。こうした生命のすごさを知ることができました。

私はこの24WSJを楽しく最後まで笑いで終われたのは、同じボーイスカウト仲間が存在があったからです。人には弱いところも、強いところもあると分かりました。

今回は最年少ということもあり、たくさん助けられました。しかし、次に自分が先輩になったら、今回の私のような子がいるときに、たくさん助けてあげることができる強い人になりたいです。



杉並3団 VS隊 城 慎太郎 ゆりかもめ班

僕はこのキャンプに行く前、少し複雑な気持ちでした。なぜなら部活の合宿と、文化祭の練習日程が被っていたからです。部員に差をつけられてしまうか、役のセリフが覚えられるか、そして心の底からキャンプを楽しめるのか。また人生初の海外旅行でもあったので、たくさんの不安が心の中にありました。しかし今は行って良かったと、心の底から思っています。

アメリカでしか体験できないような大規模アトラクション、世界中のさまざまな料理、そして何よりたくさんの外国人との触れ合いは、今までの僕の考え方や感じ方を大きく変化させてくれました。今まで海外に行った事が無かった僕には、全ての体験が新鮮で、エキサイティングなものでした。

特に外国人との交流の時には、日本と全く異なる文化を知ること、自分の世界をさらに広げることができました。ノーヴァスの交換やトレード、そして外国の親しい友達を作ること、とても喜びを感じる事が出来ました。

今回のキャンプでの2週間は、僕の人生の中ではほんの少しの時間ですが、僕のこれからの人生にとっても大きな影響を与えてくれました。

今回のキャンプをただ単に「楽しかったな～」で終わらせるのではなく、しっかりと記憶に留め、自団のスカウトに伝えていきたいです。

異なる文化を理解し、海外のスカウトと仲良くなるには、少しの勇気と少しの積極性だけでできると知りました。



自分一人の力は世界的に見ればとてもとても小さな物ですが、世界中のスカウトがこの二つを持てば、とてもとても大きなことを成し得る事ができると感じました。

また今回のキャンプでの経験を活かし、次は I S T で参加できたらいいなと思います。

杉並3団 VS隊 中村 泰葉 烏班

今回のジャンボリーはアメリカで行われた。アメリカに行くのは初めてで、アメリカといえばスケールが大きいイメージだった。今回のジャンボリーでその大きさを味わった。

そして今回のテーマが ”Unlock a new world” だった。私はこの意味を “自分の知らない部分を知ること” と考え、ジャンボリーに参加した。

ジャンボリーでは本当にたくさんの方が参加していた。国際交流をすることを中心に楽しもうと思っていたが、いざ海外の人と話そうとしても、話題が出てこなかったりした。私は普段日本人とは初対面でもすぐに話すことができるが、海外ではそれは通じなかった。



まず言語が英語なため、自分の英語に自信がない私は積極的に話すことができなかった。

しかし終わりが近づくにつれ、フィーリングでも意外に通じることができたため、もっと最初から声をかけて交流すれば良かったと、少し後悔した。このことで私は日本では積極的に自分から交流することができるが、言語が変わるだけで消極的になってしまうと気付いた。

次に私がキャンプで気付いたことは、自分の隊や班のことを長期間深く考えることの大切さだ。私は次長という立場だったから、班での問題をいろいろ解決する策を考える方だった。班の問題はたくさんあり、解決等が浮かばないものもあった。そこでたくさんの方のことをリーダーや他の班の班長と話し合っただけで模索していった。この経験はあまりなく、また他の団のやり方なども見えて、とても貴重なものになった。最終的にみんなが思う存分楽しめたと思ったから良かった。

今回のジャンボリーはさまざまな人に出会い、おもしろいことや楽しいことなどをたくさんの人と共有できたことを誇りに思った。約4万人の世界のスカウトと交流し、同じものややって、見て、感動することは普段にはないことだし、それを経験できたことがとても嬉しい。ここでの経験は私にとって最高の財産になると思う。これからの活動にも反映させながら、自分らしい活動をしようと思う。

杉並3団 VS隊 松尾 奏流 雷鳥班

今回の24WSJは、僕にとっての初めてのジャンボリーでした。そのため様々なプログラムを体験することができ、また普通のキャンプではすることのできないジャンボリー中の他国、他団との交流もできました。どれも僕にとってとても新鮮な体験でしたが、特に思い出に残っている行事はジャンボリーの開会式です。

ジャンボリーの開会式では、開幕して間もなくライオンキングのテーマソングから入り、とても盛り上がりました。生歌は初めて聞くので感動しました。しかしそれ以上にテンションが上がったのは、サプライズでベア・グリルスが登場したことです。本々僕は彼が大好きで、You Tubeでよく見ていました。その彼が目の前に現れて、僕は気絶するほど上がりました。これが僕にとって忘れられない思い出となりました。



またジャンボリーを通して、今まで交流のなかった団のスカウトと、仲良くなることができました。それに加えて知り合いであったスカウトの意外な一面や、相手を以前より良く知ることができ、互いの仲を深めることができたと思います。

さらに海外のスカウトともlineを交換するまでに仲良くなることもでき、ジャンボリーはスカウト同士の距離を近づけてくれるきっかけとなりました。

杉並3団 VS隊 松窪 遼史 カワウソ班

自分は昨年開催された日本ジャンボリーにも参加できなかったのですが、10泊以上におよぶ長期キャンプへの参加はこの世界ジャンボリーが初めての体験となりました。自分がこのジャンボリーの中で感じたことは、主に2つあります。

ひとつめは、日本と外国との文化の違いです。その中でも諸外国と比較したときに、日本の良いところ悪いところがわかりました。まず日本隊の良いところは、規則正しく、メリハリのあるキャンプ生活を送っていたところだと思います。

自分達12隊の隣には、チリ隊のサイトがありました。このチリ隊と比べると、差は一目瞭然でした。日本隊は決まった時間に消灯・起床を行い、設営・撤営のスピードは比べものにならないほど早かったように感じます。

それに対して日本の悪いところは、自分たちの国の主張が少ないところです。これは『日本』という国が終戦から背負い続けた負の遺伝子なのかも知れません。しかしながら先の大戦に対する『謝罪』『反省』と、『国に対する誇り』とは切り離して考えるべきだと思います。

開会式にサイトからアリーナへ移動する道中、他の国は自国の大きな国旗をふりながら、自国のコールをして興奮した様子で向かっていましたが、日本は違いました。どの隊も国旗を持たず、外国の渦にただ巻き込まれているだけでした。式中也他国の国旗がたなびく中、日の丸は千人規模の派遣隊にもかかわらず2～3本程度でした。日本人はもっと自分たちの国に自信と誇りを持っていけると良いと思います。

ふたつめは長期キャンプの運営の大変さです。長期キャンプになると、長い間同じ空間で過ごすため、お互いの良いところ、悪いところが目立ってきます。この状況の中でいかにして上手く隊を運営するか、それは相手を思いやる気持ちと、ストレスをため込まないようにすることだと感じました。相手の状況を自分におきかえて、今なにをされたいか、どうしてほしいかを読んで行動し合うと、自然と衝突はなくなる上、ストレスを我慢するのではなく、こまめに放出することで、ストレスフリーなキャンプが送れると思ったからです。この教訓を後輩に伝えるとともに、自団でも実践していきたいと思っています。

最後にこのジャンボリーを通じて、国内外、国籍を問わず、あらゆる人々と友情を結ぶことができました。一生でもう会わない人がほとんどだと思います。しかし4年後、韓国でまた再会することを約束しました。自分もきっとこの約束を果たして、旧友と再会し、新しい友達を作ろうと思っています。



杉並4団 VS隊 中村 晃洋 烏班

まず初めに、BIG JIPが体重制限のせいで、班員と楽しむことができなかったことが、とても心残りだった。

自分はベンチャースカウトで、グリーンバーを支えて班を運営していく立場だった。烏班は班員全員がとても仲が良く、プログラムに参加するのも、班員全員がまとまって行く事が多く、班をまとめたりする上ではとてもやりやすかった。

プログラム自体の感想は三つある。一つはBIG JIPについてだ。BIG JIPは体重制限で、自分と相澤君、渋谷君の3人で行った。ジップラインの長さ1kmは、体感的には1分くらいずっと滑っていたので、湖の上を通った時はとても爽快だった。でも発射するまでの登山がだるかった。



二つ目と三つめはMt. Jackの山の上でやったスパルタンレースとフィールドスポーツについてだ。

いろいろな障害物に挑戦する“スパルタンレース”は、スイス人と競争をした。スイス人は女の子でも余裕で自分についてくるので、すこしへこんだ。

フィールドスポーツでは、バスケの“3 on 3”を外人と対戦した。相手の外人は2m以上の長身で、日本人の自分たちは手も足もでずに惨敗した。正直勝てるとは微塵も思っていなかった。

ジャンボリーを終えて思ったのは、参加できた喜びと、できなかったプログラムへの悔しさだった。

杉並4団 VS隊 長谷川 晟 雷鳥班

今回の24WSJでの自分の目標は、いろいろな国の人と国際交流することでした。

自分は自分から人に話に行くことは、恥ずかしくてあまりできませんでした。松尾くんという新しい友達ができ、交換品などよくいっしょに交換しにいきました。

その結果、メキシコ、アメリカ、イギリス、モロッコ、スウェーデン、スイス、ポルトガルなど、いろいろな友人と写真をとったり、交換したりしました。

自分的にはとても充実した24WSJでした。モロッコのきれいな人とも仲良くなれたので良かったと思います。何人かとLINEやメールなどを交換したので、これからもメールなどをかかさずやっていきたいと思っています。その人たちが日本などに来たら案内したいと思っています。



杉並5団 VS隊 関戸 香織 ゆりかもめ班

アメリカに行く前の3日間は、心が今起きている状況について行かず、本当にアメリカに行くのか半信半疑でした。しかしアメリカのことや、これから起こることへの期待でいっぱいでした。

海外に行ってしまうことは、海外の料理が自分にあまり合わないことです。だから初日はアメリカの味に慣れるまで時間が掛かりました。



プログラムは普段体験出来ないことばかりだったので、とても貴重な経験が出来ました。特に印象深く残っているのは“the rope”です。なぜならばアメリカの自然を感じながら、スリルを味わうことが出来たからです。

閉会式では今までに体験したことのない数の花火が打ち上げられたり、エンターテイメントに触れたりすることが出来て、異世界にいるみたいでした。

また私はあまり英語が得意ではないが、Novusなどを使いながら、たくさんの人達と交流することが出来ました。

英語のスキルを上げて、もっといろいろなことを話してみたいと思いました。また海外の文化や食べ物にも触れることが出来て勉強になりました。

ゆりかもめ班のメンバーは、場の雰囲気をもっと明るくしてくれる人が多くて、とても楽しかったです。あっと言う間に時間が過ぎて行って、充実した日々を過ごせました。24WSJの経験を生かして今後は生活していきたいと思います。



杉並5団 BS隊 辻 凜太郎 雷鳥班

僕は今回約16日間の海外渡航を経験しました。

まず初めに、自分がボーイスカウトに入ってから長年の夢だった「世界ジャンボリーに行く」という目標を達成することができて、とてもうれしいです。

昨年開催された17NSJにも自分は出ており、これに引き続き大きな大会を経験できたことはとても自分にとって、また今後の人生において貴重であり、重要なものになると思います。

特に海外のスカウトやリーダーや風土といったものは、日本のものとはまったく別物であり、なにかも新鮮でした。

具体的には海外の人は香水をつけたような匂いがするし、かなり夜型なひとが多いとか、顔つきがぜんぜん違ったり、意外と日本と繋がりがあるなど多々ありました。



また開会式などの3回あった式も、17NSJのそれとは比べようがないほど大規模であり、また出演したアーティストの人も著名な方だということに驚かされました。4万3千人といった人数が一つの会場で盛り上がるというのは、とても経験できるようなことではありません。個人的には閉会式の時に出演した“Light Balance”がかなり好きで、その後の花火や“light performance”なども、かなりかっこよく楽しめました。

それに一つの音楽や動きから、外国のスカウトも一緒にみんなが楽しめたという経験は、人間には普遍的なものがあり、繋がっているということは体験できました。

人生において1度か2度しか行けない世界ジャンボリーに出場できて、本当に良かったと思いました。今後はこの楽しさや大切な経験を他の人に伝えていくのが僕の使命だと思います。



杉並5団 VS隊 富田 蓮大 烏班

早朝から撤営を始め、送迎車を待つ。少し時間があるから自分のサイトを写真に撮る。テントを張っていたところのみ、明るい色の芝が生え、道線は芝がはげ、茶色の土が出ている。ジャンボリーに思いを馳せた。

開会式、さまざまな形式や色の旗が辺りを彩っていた。50コの星、赤と白の横縞の米国国旗が天を仰ぐ中、自分たちは日の丸を持っていなかった。萎えを覚えた。ジャンボリーはここから始まった。気持ちは少し消極的になってしまった。

一日は短い。会場が広いこともあり、プログラムの場所は一箇所に集中していない。

往復で6時間、迷子は平均的だった。しかしここはU.S.A.！ American Dreamsが通用され、更にWorld Scout Jamboreeだ。迷子を楽しめない理由がない。Novusとやらのおかげか、外国スカウトが積極的なおかげか、自分たちが今U.S.A.にいるという満足感のおかげ（おそらくこれが一番だと思う）か、あるいは宿題からの現実逃避のためか、交流への意欲が旺盛だからだ。

外国スカウトと英語でコミュニケーションをとってみる。ここで疑問を一つ。彼らは何故あんなにも話しかけてくるのだろうか。こちらが英語ペラペラだと思っているのか。それともただ耳が慣れていないだけか。

一日は長い。プログラムが午前中で終わるときの気持ちの余裕は、そこにいないと体験できないと思う。その余裕もJamboreeの醍醐味だと思う。

今回の24WSJを一言で感想を言うならば「控えめに言って最高」。しかし逆を言えば、とても名残おしい。大学の寮で美味しい食事をして、U.S.A.の首都を観光しても、WSJに勝るものはなかった。

「感想文」だが、学んだことや教訓は書かなかった。僕が書きたいのはJamboree（ほらもう何も見なくても英語標記で書けるよ！）が楽しいということだからだ。楽しいという一つの結果は、外国/WSJ/英語/長期間/派手という様々な過程をふんでいる。

僕は今、24WSJを惜しみながら、文明的な生活を過ごしている。



杉並6団 VS隊 菊池 巧真 ゆりかもめ班

今回の世界スカウトジャンボリーに参加してみて、まず感じたことはとても良い経験になったということだ。その具体例として英語でのコミュニケーションについて挙げていきたいと思う。

自分は初対面の人と話すのが苦手ということもあって、英語でコミュニケーションをとるまでにかかなり時間がかかってしまった。しかし一度英語での会話が成功すると、話すことが楽しくなり、いつの間にか自分一人で外国の人とコミュニケーションがとれるようになっていた。またこれがきっかけで、外国スカウトとの交換も出来るようになり、自分が持っていった交換品は、ほとんど外国の物へと変わってしまった。

世界ジャンボリーという大きな行事を経験して、話したいことは他にもある。アトラクション日常生活についてだ。



アトラクションではジップラインやスキューバダイビングなどに行き、8つのアトラクションに参加した。

その中でも特に楽しいと感じたのは「The ロープ」だ。このアトラクションは木の上にロープで作られている障害物を渡るというものだ。高いところが好きな自分としてはとても楽しく、気持ちが良かった。

日常生活に関しては、個人的にいろいろと問題なこともあったが、全体を通してはかなり充実したサイト生活を送ることが出来たと感じている。

ジャンボリーに行く前はいろいろと心配なこともあり、かなり不安だったが、結果的に言葉で表せないくらい楽しかったので良かったと思う。世界ジャンボリーで学んだことを、これからの生活に活かしていけたらよいと思う。



杉並9団 VS隊 相澤 岳琉 カワウソ班

私は今回の第24回世界ジャンボリーから、いくつかのことを学ぶことができました。その中でも大きなことの一つとして、日本の普通の高校2年生の自分が、「世界平和の一端を担うことができる」ということを学ぶことができました。

何故私がそう感じたかという、初めは何も考えずに海外スカウトとワッペン等の交換を楽しんでいただけでした。しかし、ある日のGB会議の際に、自隊の隊長から『海外スカウトと交換をするだけで終わるのではなく、もう一つ踏み込んでみろ』と言われて、海外スカウトとの交換の際に、単にワッペンを交換するのではなく、少しでもいいので話をしてみるようにしました。

その結果、ワッペン等の交換している相手の国について知ることができ、その国に対して親近感を持つことができました。



また私は世界の国々が違う文化や考え方を持っているので、争いが起きてしまうことは当然だと思います。しかし少しでも相手の国の文化について知っていれば、避けられる争いも多く有ると感じました。

第24回世界スカウトジャンボリーに参加するまでは、世界平和のような大きな国際問題に自分ができることなどないと思っていたのです。しかし今回世界中のスカウトと交流し、自分なりの国際平和を実現するためにできることは、とにかく多くの国のスカウトと交流し、その国のことを知ることだと分かりました。これこそ自分ができると世界平和実現の一歩だと思いました。

杉並9団 BS隊 坂本 侑雅 ゆりかもめ班

僕はこの世界ジャンボリーにおいて学んだことが2つある。世界中の人々と仲良くなれること。また時間を無駄にしてはいけないことだ。

僕は英語があまりできないが、今回のジャンボリーにおいて成長したと思う。自分から他国人に話しかけ、積極的に話したからだ。理由は自分が日本ジャンボリーではあまり外国の人と話さず、日本人としか話さなくて閉鎖的だと思ったことと、アメリカ人の親戚でボーイスカウトをしていた人が、他国人と積極的に話さないと意味がないと言ったからだ。また自分の英語が下手でも、他国のスカウトと仲良くなれたことがとてもとてもうれしかった。



自分は今回の世界ジャンボリーがとても短く感じた。最初は他国のスカウトと話すことを渋っていたが、段々話すことが楽しくなっていき、気付けば閉会式になっていた。

このことを通して、僕は時間を無駄にしてはいけないことを学んだ。今回の世界ジャンボリーを通して、時間を無駄にせず、怖がらず、積極的に世界中の人々と話していくべきだと思った。

世界ジャンボリーのアトラクションは、日本ジャンボリーと違い、桁違いで驚いた。

一番印象に残ったものはアーチェリーで、自分は小学校からアーチェリーをやっていたため、非常に感慨深かったです。また成果を出せてうれしかったです。



杉並9団 VS隊 杉本 慈 雷鳥班

12日間の24WSJは、僕を様々な面で成長させてくれた。

開会当初、僕は下調べをしていて、多くの情報を持っていることから、コースリーダーに任命された。雷鳥班の次長も兼任していたので、最初は戸惑うことばかりだった。しかし他の班員が次長の代わりにしてくれ、サポートしてくれたことで、とても助けられた。そしてこれこそが、誓いの一つである「いつも他の人々を助けます」につながるのだと思った。

またアメリカでの開催であるということもあり、言語については何度か壁にあたることがあった。まず一つ目は、ユースリーダー会議である。初日は全く状況がつかめないまま早口の英語で話され、内容をつかむことだけで精一杯だったが、だんだんとまわりの人と情報共有もできるようになった。この会議では様々な隊から一人ずつ人が来るため、多様な人との交流が出来た。

また二つ目は、各アクティビティは危険を伴うプログラムが多く、説明が細かいため、英語ができるスカウトに対して通訳をすることを何度も求められた。

そのような場面の通訳をしていく中で、自分が訳す際に取捨選択が必要であるということが分かった。これは今後、情報社会で生きていく中で必須となる能力だと思う。

交流を通して、普段生活しているだけでは会うことはないであろうアフリカの国々の人などに会い、文化の違いを大きく感じた。

ショップ等で待つ行列でも平気で横入りしてくる人など、自己主義を強めることによって生きていくことができる国民性などを感じて、日本人も国際社会で対等に渡りあっていくためには、特有の奥ゆかしさだけでなく、自分の意見をはっきり持つべきだと思った。

全体を通して、本当に学ぶことが多い日々だった今回の経験を無駄にせず、今後のスカウティングや日々の生活に生かしていきたい。



杉並9団 BS隊 高見 玲英 カワウソ班

世界スカウトジャンボリーが終わりましたが、一言で感想を言うなら「楽しかった」です。

アクティビティ、交換、大集会など、日本ジャンボリーの比にならないぐらいの規模で、とても楽しむことができました。でも、キャンプの中では苦勞したことや、辛かったこともありました。それについてくわしく記したいとおもいます。

最初は、長時間の移動で疲れている中の設営がありました。そのときにいきなりアメリカ隊の応援があり、すこしおどろきましたが、世界ジャンボリーに参加しているということの実感がわきました。

そして次の日の朝には、もうアクティビティにいきました。アクティビティはとても大きなスケールで、土地を大いに使って、盛りだくさんの体験をすることができました。

最初は、アーチェリーとザパーク（スケートボード）でした。アーチェリーなど、日本ではそんなに簡単にすることができないアクティビティがたくさんありました。特にスパルタンレースや、大きな湖を使ったパドルボード、アスレチックのようなザ・ロープやキャノピーなど、とても感動しました。



次に交流についてです。僕はワッペン（バッジ）の交換にかなりの重点を置いていきました。結果、たくさんのワッペン、4つの制服、たくさんのネッカチーフを手にすることができました。そのときNovusを交わしたり、握手をしたり、英語で会話をしたり、たくさんの交流をしました。交流会では僕はデンマーク人と文化について話す機会がありました。とても有意義な時間を過ごすことができました。

次はキャンプ自体についてです。友と楽しく、問題なくすごせたのでよかったです。みんな優しく、友がいたからこそその思い出もかなりできました。

食事は最初すこし驚きましたが、後の方は慣れていきました。アメリカ人の食文化にも、少しふれることができたのも、とてもいい体験だったと思います。

今回のジャンボリーでは、あっという間に時間が過ぎてしまいました。学んだことは「知らない人と関わることの楽しさ」です。それが主だと思います。

今回のジャンボリーは様々な文化、人種、言語の人たちを見ました。その人たちと交流を交わすことで、新しいことを知ることができ、貴重でとても大切な時間とすることができました。



杉並11団 VS隊 大森 直幸 烏班

今回の世界スカウトジャンボリーを通してさまざまな経験ができました。

特に自分が強く印象に残っているのは、日本と世界の文化の違いでした。どうしてそれが印象に残ったかというと、まず訪れた国がアメリカだったことです。アメリカは自分たちが住む日本とは国力が何倍もあります。それに多民族複数国家であることから、多くの人種や宗教の考えをある程度しなくてはならず、様々なところで厳しいルールがあると思いました。

そしてやはり大きなイベントに対する力の入れ方も、日本とは対照的だと思いました。とくに閉会式のラストを飾った大花火大会は、まさしくアメリカを見せつけられ、圧倒されました。

他にも各アクティビティでは、前説明でしっかりと普段気にとめない知識を知ることができました。またここでも日本とはちがい、制限が無く、参加の有無を自分自身で決めることのできる自由さも、日本とは違うと思いました。

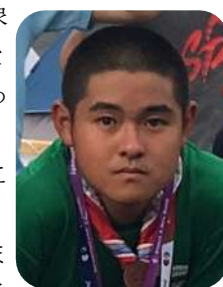
ただその反面で、良い意味では大胆で面白かったのですが、悪く言ってしまうと、少しおどろきだなあ、とも思いました。こうした文化の違いや考え方の違いは、自分と社会が良くなるために、良い部分を上手く抜き取って、自分の将来に役立てたいと思いました。



そして交換についてですが、やはり海外のスカウトたちは皆とてもテンションが高く、それでいてとてもフレンドリーだと思いました。歩いていけばハイタッチでNovusの交換、チーフやワッペンなどの交換をすぐに求めて来てくれ、とても助かりました。

このように一度に世界中のいろいろな、たくさんの人と同時に楽しい思い出を残す経験を高校生の若いうちに体験し実現できたことは、一生の宝物になったと思います。

最後に今回のジャンボリーの参加を支えてくれた母に、感謝したいと思います。



杉並11団 BS隊 佐々田 詠哉 カワウソ班

僕にとってこの第24回WS Jは二回目のジャンボリーでした。

二回目のジャンボリーと言っても、初めて参加したジャンボリーは第17回日本スカウトジャンボリーだったので、今回参加した24WS Jは、一応初めてのジャンボリーでした。

このジャンボリーでは、様々なアクティビティが用意されていました。その中で僕は合計6個のアクティビティしか体験することができませんでした。その理由としては、夏のアメリカの太陽の強すぎる熱にやられてしまい、アクティビティをやっている場所まで行くのが少しだるくなり、キャンプサイトで一日をのんびり過ごしている日が何日かあったので、あまり出来なかったのだと思います。いまさらながら、そののんびり過ごしていた日を一日一回でいいから、アクティビティに費やせばよかったなと思います。

そして僕はこの24WS Jで本当に色々な物を見て、体験し、学んだと思います。例えて言うと食器を洗う時に用いた4つの箱に、順に水→お湯→消毒液に入れて、最後の箱を乾燥用にして、洗い終わった物から最後の乾燥用の箱に入れていくという洗いやりのやり方が、僕はとても興味を引かれました。

また他のことと言うと、服の洗い方にも興味を引かれました。その洗い方は大きめのジブロックに洗いたい物を適度につめこんで、洗濯用の洗剤を少量入れて揉み込むというやりです。

このように例に出した二つ以外にも、自分が学んだと思うことは多いにあるので、日本に帰り、自団のキャンプや普通の活動に多く活用していきたいと感じました。

最後に僕はこのWS Jに参加してとても楽しく充実した日を過ごせたと感じ、そして次のWS Jにも参加したいと思いました。



杉並11団 VS隊 吉岡 大輝 雷鳥班

今回世界ジャンボリーに行くにあたって、個人的な目標として、いろいろな世界のスカウト達と交流し、日本と他のスカウトの違い等を知ろうと思っていた。しかし達成できなかった。

その原因としてまず自分の英語力不足があげられる。今回の世界ジャンボリーで、他のスカウトやISTの説明を聞いても半分も理解することができず、他のスカウトに助けをもらってばかりだった。

次に自分のコミュニケーション能力不足があげられる。Novusなどもあり、交換等で話しかけてきてくれる人は多くいたが、話を広げることができず、外国のスカウトと仲良くなったりすることが出来なかった。



最後にジャンボリーを振り返って、一番楽しかったのはジップラインだ。ビックジップは体重制限でできなかったが、短いジップラインでも十分楽しむことができた。

生活は本当に日本とは違うと感じた。いろいろな物が大きくつくられていて、日本が小さいことを実感した。そして2週間の生活で英語ができないことの不便さを実感し、これからもっとグローバルな世界になっていくので、しっかり英語の勉強をしようと思った。またこの世界ジャンボリーに参加したことはこれからの人生でもとても良い経験になると思った。



杉並12団 BS隊 石澤 彰人 雷鳥班

今回のWSJで、僕はアクティビティを楽しむ事と、文化交流をたくさんすることを目標にしました。

アクティビティでは日本を出発する前から、班のみんなといっしょにどのアクティビティをやりたいか、どうすれば効率的に行動できるかなどを話し合いました。

そして現地では班行動や少人数行動で、ジップラインやラフティング、ボルダリングなどのたくさんのアクティビティを楽しみました。中でも印象に残ったアクティビティはWater realityとラフティングです。



Water realityは水面に浮かぶ障害物を突破していき、ゴールまでのタイムをきそうアクティビティです。このアクティビティはとても人気で、とても並びました。僕は4人チームで協力してクリアしました。

タイムは5:25でその日のトップ10に入るほどの記録でした。とても嬉しかったです。



ラフティングはもっと人気で、1つの隊で20人までしか行けないということで、抽選をしました。僕は運よく当たり、ラフティングに行けることになりました。ラフティングの前日に雨が降ったけれど、水位が上がるほど川の流れも速くなるため、とてもわくわくしていました。実際にラフティングが始まって漕ぎだすと予想以上に楽しく、川を泳いだりもしました。

また10年ほど見かけなかったというワシの群れにも遭遇できて感動しました。

文化交流では、今回のWS Jから取り入れられたNOVUSや交換などを通して、様々な国の人と交流をしました。

NOVUSのような気軽に声をかけられるツールがあると、すぐに交流できるため、改めて感心しました。

たくさん交流できたので、カッコいいパーカーのトレードや外国人の友達など、普段では体験できない事をたくさんできました。

今回の目標である2つを達成して、僕はもっと交流などしたいと思いました。また今度このような体験ができる機会があれば、積極的に参加したいです。

杉並12団 BS隊 加藤 陸 ゆりかもめ班

今回の世界ジャンボリーで、私は二つの目標を設定しました。

先ず一つ目は国際交流です。世界にいるさまざまなスカウトたちと交流し、何か新しいものを得ることで、なにか生成したいと思いました。

二つ目の目標はアクティビティを存分に楽しむことです。世界ジャンボリーに行くからには、何か思い出を作りたいなと思い、設定しました。

先ず一つ目の国際交流という目標は、8割達成することができました。Novusなどが外国の方々と触れ合う機会を作ってくれて、物の交換などがスムーズにできました。

そして外国の方々と交流していくうちに感じたことは、今日本には海外の人々と考えを共通することができるグローバルな人材が必要になってきている、ということです。

普段いかに外国人とふれ合っていないかを理解しました。

二つ目はアクティビティについてです。今回の世界ジャンボリーでは7つのアクティビティを楽しむことができました。その中でもウォーターリアリティーが一番印象に残っています。4人で協力して、その日のランキングの上位に載ったことが、私に協力の大切を実感させてくれました。

これらの体験から世界ジャンボリーで二つの目標を達成することができて本当によかったと思います。この経験を生かして、これからの生活をよりよいものにしていきたいと思います。



杉並12団 VS隊 橋田 哲一 烏班

約2週間のキャンプ生活を通し、いろいろな事を学んだ。

アメリカといういままで経験したことのないような場所でキャンプをしたことにより、食事の大切さを改めて実感した。最初のほうは問題なかったが、後半からアメリカ独特の強烈な甘さやしょっぱさにより、体の調子が最初よりも悪くなった気がし、野菜もあまり食べていなかったのでも、少し変な感じだった。でも他の隊は日本にはないすばらしくおいしい料理を作っていたのですごいと思った。カルチャーディの日は、もう少し日本食らしいものを出したかった。

シャワーというのは、日本にいと湯が出るものだと普通に思っていたが、水しか出ないというのはおどろきで、初日はとても寒かったが、後半は慣れることができ、人間の順応性におどろいた。

最後に英語はとても大切だと感じた。日本にいとあまりそのような事は思わないが、アメリカに行くとアクティビティの説明も全て英語で、放送も英語で大変だった。バッチの交換のときは、英語圏が相手だとうまくまとめられた気がした。日本に帰ったらリスニング能力を上げたい。



杉並12団 VS隊 小平 桂彰 カワウソ班

疲れしました。とにかく疲れしました。しかしそれはとても自分が楽しめた証でもあると思っています。

数あるアクティビティは全て楽しむ事ができたのですが、その中でも一番はジャック山の山頂のスパルタンレースです。障害物レースが元々好きなのですが、さらに大自然の中となるとワクワクが止まりませんでした。



二番目に楽しかったアクティビティはマウンテンバイクとスケートボードです。両方とも日本にかえたらまたやってみたいと思うくらい、スリリングで印象的な体験でした。

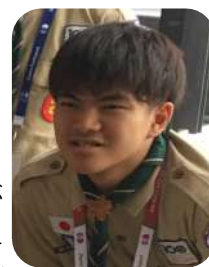
他にもクロスボウやカヤックなど、普段は出来ない体験ができて良かったです。

楽しいことだけでなく、学習し、発見した事も数多くありました。初めての飛行機だったので、チケットの買い方、手荷物や入国など、いろいろな初体験がありました。

また初めての外国でもあるので、日本との文化の違いや、気候の違い、地理的な違い等を知りました。また自分が世界の中の日本という小さな国にいた事、世界は広い事を知って、国際社会に対する考え方も一つの固定概念ではなく、多角的な考えになりました。

今回のジャンボリーを通して、ボーイスカウトのすごさを実感しました。また、自分の今までの考え方がグローバルでなかったことも知りました。

日本に帰国してからも、もっと広い視野を持って国際交流を大切にしたいです。



杉並13団 VS隊 飯島 美帆 カワウソ班

オリンピックセンターで過ごした期間は、アメリカに行くという実感は全くありませんでした。ですが空港に着いて飛行機に乗ると、これからアメリカに行ってキャンプをするのだ、という実感が段々とわいてきました。

会場では毎日様々なプログラムがあり、私は一日一つのペースでプログラムに参加しました。

特に楽しかったのはStandup Paddle Boardingです。Paddle Boardingは空気の入ったボードに乗って、バランスをとりながら湖の上を移動するというプログラムで、並んで見ているときは簡単なのかなと思って見ていたのですが、いざやってみると意外と操作が難しく驚きました。慣れてくると操作も簡単になってきて楽しかったです。

どのプログラムも日本では経験できないことが出来て、とても勉強になりました。今後の生活に生かしていきたいと思います。

また食事が全く日本とは違うなと思いました。全食がほとんどパンでしたが、私はパンが好きなのでまったく苦しくありませんでした。フードハウスでは毎日様々な国の料理を食べました。

特にポルトガルのブースのリファーナがおいしかったです。他にはアメリカのブースではハンバーガーとポテト、カナダのブースではメープルアイスコーヒー、レモネードなどを食べました。どの国の料理もとても美味しかったです。



歩いていると色々な国のスカウトが交換やNovusを求めて話しかけてくるので、とても良いコミュニケーションの練習になりました。また他の国の制服はスポンが自由な所が多いと思いました。少しですが英語も出来るようになった気がします。

オリンピックセンターから帰国までの2週間はあっという間に終わってしまいましたが、1日1日とても貴重な経験ができて、24WSJに参加して得たものは大きいなと思いました。今回の経験を今後の学校生活などに活かしていきたいと思います。



杉並13団 BS隊 及川 晴香 ゆりかもめ班

私は今回の第24回世界ジャンボリーでたくさんの刺激を受けました。

まず一つ目として、自分の住んでいる国ではない所での生活をしたということです。

一番の違いは食生活だと思います。私たちの住んでいる日本よりもカロリーが高そうで、栄養バランスのとり方がいつもと違いました。また普段食べないようなものや、見たことのないものもあり苦労しましたが、新しい食べ物の発見や、そこから分かる文化の違いなどを知れてよかったです。

二つ目としてプログラム体験です。プログラムでは通常の生活ではしないようなこと、やってみたことのないことができました。とくに、Zip Lineは高い所を下の景色を見ながら滑って、すごく気持ちよかったです。

三つ目は外国の人と交流したことです。これはジャンボリーでしか体験できないことだと思います。人種や出身、文化などの違いを学びながら、楽しく交流できました。言語が一番苦労しましたが、一生懸命話して伝わったときはすごくうれしかったです。

今回の体験は一生できないことだと思います。55万円をめいっぱい楽しんだのでよかったです。この経験を今後のスカウト活動、次のジャンボリーの世代につなげていきたいです。



杉並13団 VS隊 大澤 健 ゆりかもめ班

約2週間をアメリカのウェストバージニア州サミット高原で過ごしました。

僕は人生で初めての海外で、とてもワクワクしていました。そしてアメリカのワシントンDC空港へ着いたとき、やはり日本とは違う違和感を持ちました。身の回りにあるもの、例えばトイレ、エレベーター、浴室など、違いがはっきりしていました。

何よりすごくアメリカンを感じたのは食事でした。小麦を使った料理がとにかくたくさん出ました。そして飲み物のほとんどが炭酸飲料で、お茶がなくて、唯一体に良さそうなのが水でした。

健康に関してはあまり意識していないのかなと思いました。肥満率の高さからして、食事情はとてつもない状況です。

今回のWS Jは色々で戦場だなと思いました。アクティビティ、充電スポット、交換品、配給された食料品です。初めにアクティビティは人気なところだと5時間待ち、または、いっぱい閉まるかになってしまいます。

しかし僕たちは何故か希望のアクティビティへ行くと、必ず空いているという現象があり、とても幸運でした。中でもジップラインがとても楽しかったです。

充電スポットはUSBがたくさんあり、充電できるのですが、充電される速度が限りなく遅くて、1時間たってもほんの数パーセントしか充電されませんでした。しかも毎日毎時間も混んでいて、空いている場所が限られていたため、結構苦労しました。



交換品に関しては本当に戦場でした。日本のチーフとリュック、そして着物がとても人気で、日にちが経つにつれてだんだん価値が跳ね上がっていき、着物をチーフとワッペンやパーカーと交換したりしていました。毎日外国のスカウトがたくさん我々のサイトに来ては、チーフが欲しいだの、着物が欲しいだのと言いつづけていました。

配給された食料は物の偏りが激しくて、ナッツ類が大量に余ってしまったりして、処理がとても大変でした。

今回のWS Jを振り返って、なんだか海外との交流で遊んでいる感じがしました。しかし、学ぶ機会が圧倒的に多かったです。

英語で説明を受けたり、英語でキャンプファイヤーをしたり、楽しんでいるように見えて、難しく苦勞していたのかも知れません。

しかし今回この貴重な経験を得られて、本当に幸せだなと感じました。日本連盟、そしてリーダーの方々や杉並13団の方々、本当にありがとうございました。



杉並13団 BS隊 小林 璃音 雷鳥班

私は今回の世界ジャンボリーで様々な国のスカウトと交流するのが目的の一つでとても楽しみにしていました。

最初は簡単に交流出来て、たくさん友達ができるだろうと思っていました。でも実際に話すとなると、上手く英語が伝わらず、苦戦して班長に頼ってばかりで、なかなか話せませんでした。

特に空港で知り合ったオランダの女の子が、最初に英語で話した子だったけれど、全く内容が理解できず、あまり話せなくて悔しかったです。同い年の子も同じ風になっているかなと思ったから、二人とも私より英語ができて「私は頑張ろう!」と思いました。

その後わからない単語は聞いたり調べたりして、なるべくたくさん話せるように努力しました。話したいというのが伝わると、相手も理解しようとしてくれて、だんだん会話ができるようになりました。そしてインドネシアやオランダ、台湾の人たちと友達になることができました。それでもまだ英語の能力が足りないので、これからはもっと真面目に勉強して、次に海外へ行くときはたくさん話せるようにしたいです。

さらに私は24WSJ中に決めた目標があります。それは中学2年生だけど、班で一番班長に頼りにしてもらい、中学3年生や高校1年生よりも頑張るといことです。初日などはみんながやってくれるだろうという気持ちがありました。でも「年下だけど自分は中学2年生なんだ!」と思うと「仕事を探してそれをやろう!」と思いました。それから毎日まず机拭きをしました。さらに机の上にある物を片付けるよう呼びかけたりもしました。

小さな仕事しかできなかつたけれど、少しは役に立てることができたと思います。自団でもこのまをみんなにして、よりよい活動ができるようにしたいと思います。24WSJでは大切なことをたくさん学べて、本当に楽しかったです。次の韓国の25WSJに行く子にいろいろ教えてあげて、みんなの役に立ちたいと思っています。



杉並13団 VS隊 澁谷 光太郎 カワウソ班

世界ジャンボリーでの18日間は僕にとって今までの人生で一番密度の濃い、学ぶものが多い時間だった。

僕の世界ジャンボリーの目的は楽しむことよりも、自分自身を成長させることだった。なぜならあくまでも僕の考えだが、自分の人格を高めることが何よりも大事なことで、そしてその自己実現のために時間を費やすことは、とても価値があると思っているからである。

今回のジャンボリーは、その自分の成長に繋がる貴重な経験がたくさんできた。それは大きく分けて2つある。

一つ目は国際交流についてだ。

いつもは数千、数万km離れたところに暮らしている国籍も文化も全く異なる何か国もの人々が、サミットベクトル保護区に集まり、たった数m先のサイトにいて気楽に話に行けるということは、世界ジャンボリーでしか体験できない状況であり、深い感銘を受けた。

特に中日のCulture Celebration Dayでは、それぞれの隊が各国の料理を作って振る舞ったり、伝統文化などを紹介合ったりして、自国とは異なる文化に触れ、理解を深めることができた。

さらにシカゴ隊やポーランド隊と交流会を開いたのだが、その時互いの言語を教え合ったり、アクティビティについての話をしたり、自国のトランプゲームを教えて一緒にやったりするなどの貴重な経験をすることができた。これらの経験から、僕は国と国との条約などではなく、このような国民同士が異文化に触れ理解し合うことこそ、世界平和への第一歩だと思った。

二つ目はアクティビティについてである。

今回の世界ジャンボリーは、サミットベクトル保護区内にいくつものアクティビティが用意されていて、スカウトは任意でそれに参加できるようになっていた。

僕はアーチェリー、スケボー、キャノピーなど、たくさんのアクティビティに参加したが、一番印象に残っているのはやはりビックジップだ。このビックジップは北米最大級のものであり、メインのアクティビティでもあったため、爽快感がとても大きく、楽しかった。このようなアクティビティを日本でやろうとなると、かなりの時間とお金が掛かってしまうし、そもそもあまりできる機会がないため、今回できて本当によかったと思う。

さらにオプションでできるラフティングも、僕は強く印象に残っている。僕らがラフティングをやった時は、丁度晴れていたため川の流が穏やかで、泳ぐことができた。



泳ぎながら僕は「この時間、世界で誰よりも自然を満喫している」という不思議な自信を持っていた。というのも、アメリカの山奥の川に全身浸かって泳ぐということは、この上なく自然を体感していると思っていたからだ。

このように今回の世界ジャンボリーでは、日常生活では体験することのできない貴重な経験をすることができた。これらの経験により、僕は出発前の自分より大きく成長することができ、新たに色々なことを発見し、学ぶことができた。これからはこれらの経験や発見を大切にしながら、色々なことに取り組んでいこうと思う。

第9隊・第12隊 指導者

第9隊副長

中野8団 VS隊副長 沼上 晶子

7月19日から8月5日まで、16泊18日間。夏休み時期とは言え、そんな長い連続有給休暇は取得したことがないけれど、働き方改革が叫ばれる昨今だから、まあなんとかなるだろう。そう思って第24回世界スカウトジャンボリーの指導者に手を挙げたのは、もう2次募集も締め切った後でした。派遣隊の指導者経験は16NSJの1回だけ。それでも派遣隊指導者、特に女性指導者がなかなか集まらない、という声がどこからかずっと聞こえていたので、私が参加することで世界ジャンボリーに行きたい女子スカウトが少しでも多く行かれるのなら、と思い決心しました。8年前に当時高1だった娘が参加させていただいたことの恩返しの気持ちも、少しだけありました。



蓋を開けてみると、私が所属することになった9隊に、あすなる地区のスカウトは4名のみ。残りは城東地区と大都心地区という子どもたちとの顔合わせから私の24WSJが始まりました。

隊での私の役割は、現地での渉外担当と、未知の世界に対するスカウトたちへの最初の指南です。出発までに学校や体調の理由でスカウトは32人に減っていました。

ジャンボリーの活動は、スカウトがアクティビティーに出かける、イベントに参加する、合間にワッペンなどのグッズの交換（パッチトレード）を楽しむ、夜には交流会を行うことが主で、指導者はサイト管理、イベント参加や交流会のサポート役です。C4サブキャンプでのリーダーミーティングに出かけ、その際に足りない支給品をリクエストしていました。それでも安心して待てられないのが欧米流の運営。毎日毎日聞いていたら、担当スタッフが付きました。あとから聞いたところ、サブキャンプの全派遣隊にスタッフが割り振られていたのではなかったようで、「JPN009隊はうるさい」と思われたのかもしれない。

日本のスカウトたちは、最初は外国のスカウトからパッチトレードに英語で声を掛けられると臆していましたが、英語を話すことに躊躇がないごく一部の仲間が話しているのを参考にしながら次第に慣れていき、そのうちトレードの駆け引きまでできるようになっていました。日本の派遣団ネッカチーフや支給品の法被はとても人気がありましたので、法被を元手にイーグルのワッペンが付いたアメリカの制服を手に入れたスカウトもいました。

コミュニケーションは自分が伝えたい内容を持っているかどうか。英語が流暢に話せなくても、単語を並べるだけでも日本語で話していても、伝わる時には伝わります。私の英語もネイティブからすればひどいものかもしれませんが、伝えたいことがある！という勢いで話していると相手は聞いてくれました。スカウトたちにもそんな「伝えたいという気持ちが大事」ということを少しわかってもらえたかな、と思っています。

彼らはこれからどんどん世界へ出ていく若い芽です。多感な十代に、いろんな国の人たちと話をすることができたのは素晴らしい体験だったのではないのでしょうか。実際彼らは異文化に揉まれて、それぞれ得たものがあつたと思います。それはスカウトたちから寄せられた報告書にも、自らそのことを感じ取っている記述に見られます。派遣隊指導者として、スカウトの成長が何よりのお土産です。

派遣隊指導者の最大の使命は、全員を無事に連れて帰って帰ること。元気に成田に帰って来てホッとしました。この度は、派遣隊指導者として参加するにあたり、地区の皆様を始め、多くの方々にご支援いただきました。本当にありがとうございました。

第12隊隊長

杉並6団 BS隊副長 儘田 哲夫

最初の3日間は雨にたたられ、その後は一転して酷暑が続く厳しい天候であった。その中で、日々のルーティンを早朝からこなし、一方続出する問題解決に深夜まで忙殺される毎日であり、睡眠時間も十分に取れず、体力的に厳しかったのは確かであった。

しかしスカウト達が次第に雰囲気馴染み、積極的に参加したプログラムを通して、アメリカと日本の違いを感じ取り、夫々の長所・短所を明快に認識したのは大きな成果であり、指導者として嬉しい限りである。

「セレモニー後の退場が無秩序で危険でさえあった一方、セレモニーの内容は楽しく演出され、若々しさに溢れていた」とか、「各プログラムでも如何に楽しめるかに腐心している反面、日本であればもっと安全管理に重点を置くのではないか」等の意見がスカウトから出された。

どちらが良い・悪いと決めつけるのではなく、様々なやり方があり、それは即ち国民性とか文化の違いであるとスカウト自身が実感したジャンボリーであった。

さらには普段日本のスカウト同士の付き合いと比較して、外国スカウトとの交流では、心の間口を広く構える必要があることを学び取った様子であった。ジャンボリーの実体験がスカウト達に自然と国際性を植え付け、将来の糧となって役立つものと期待する次第である。

次にエピソードを一つ付け加えたい。

背の高い上品なアフリカ系のリーダーと道すがら何気なく話し始めたのは、C-1のBase Campからの帰り道だった。聞けばナミビアの隊とのこと。暫く歩きながら世間話をした後、彼は急に真顔になって話し始めた。「実はナミビアではあらゆる物資が不足している。ついては日本隊のテントを譲ってくれないか」と。



日本連盟からはテントは持ち帰らないよう指示があったため、譲ること自体は問題ないと判断し、さらに念のためBase Campに相談した所、「個別にテント授受のやり取りをして結構」との確認が取れた。改めてナミビア隊に譲渡する旨を伝え、8月2日の出発日早朝に受け渡すこととした。

当日朝6時過ぎに副長の女性が我々の準備状況を確認に来た後、ナミビアのスカウト達が約束通りテントを受け取りに来た。彼らは実にテキパキと作業し、カートで22張のテントを運んで行った。

このテントがアフリカの地で人々の役に立つと思うと、我々リーダーもスカウトも朝焼けのような晴れ晴れとした気持ちに満たされた。ジャンボリーで実現した思いがけない国際親善であった。

第12隊副長 杉並3団 VS隊副長 内田 朋子

8月5日16時過ぎに、ユナイテッド航空803便は無事成田に到着しました。

スカウト35名、リーダー4名の計39名の12隊全員が、笑顔とともに帰国しました。この笑顔が24WSJのすべてを物語っているのではないのでしょうか。

あすなる地区の杉並の団スカウト27名、山手地区の渋谷・目黒の団スカウト8名の初顔合わせから始まった12隊の活動で、スカウトたちはいつも元気で頼もしいかぎり。GBの選出も難なく終え、班活動も回を重ねるごとにまとまりを見せていきました。

現地のサミットベクトルは、初日は雨模様でしたが、設営時には一時止み、アメリカのスカウトの助けを借りて、設営は無事に終了しました。その後は晴天が続き、暑さとの戦い。突然の雨と雷には驚きました。

日中と朝晩の気温の寒暖差にスカウトの体調を心配しましたが、まったくの杞憂に終わりました。日を追うごとに逞しさを増すスカウトに、目をみはるばかりでした。自分たちで考え、行う、すばらしき時間です。

テントサイトが角地だったため、たくさんの外国スカウトが気軽に声をかけてきます。最初は控えめでしたが、徐々に活発に自分たちも声をかけていきます。期せずして始まるトレーディング、後半にはスカウトたちは半数以上が外国隊の帽子やネックチーフ、そしてザックになっていました。

初のリーダーとしての参加でしたが、一番成長したのは自分自身かもしれません。指導者としては欠点ばかりが目立ちましたが、自分の中ではすっきり！の24WSJ参加でした。

最後に、参加にあたりご支援・ご協力をいただきました団、地区、関係各位のみなさまに感謝申し上げます。今後のスカウトたちの活躍も非常に楽しみです。

